

斜塔

大村伸一

斜塔を見るために故郷を離れた。

小学校にはいる前に旅行記の写真で斜塔を見てから、いつかかならずこの塔を見に行くのだと心に決めていた。

それから二十年が経ちはしたが、塔に行くことを忘れたことはなかった。

十歳の頃両親を交通事故でなくしたが親戚を転々としてもいつも馴染むことがなく中学を出てすぐに働くことにした。菓子屋の住み込みの見習いとして六年、その間中学の教師の勧めもあり、通信制で高校を卒業した。浪費の習慣もなく和菓子屋で働いた給金はほとんど預金していたが、斜塔に行けるだけの費用が用意できるまでさらに十年かかった。

飛行機を十回以上乗り継いだのは一番安い空路を選んだからだろう。最後の飛行場で降りると着陸したばかりの滑走路にはたちまち分厚い雪が積もりこんな天候では斜塔はすでに雪の重みで倒れてしまっているのではないだろうかと思えた。

空港にある観光案内をみても斜塔はなかった。雪で潰れたのではなくもともとこの町に斜塔などなかったのだ。ことばの分かる観光案内係と対面できるまで半日かかった。彼は一週間の休暇をとっていたのだという。斜塔と言うと彼の顔からそれまでの笑顔は消え黙ってしまったがやがて静かな声でそんなものはないと言った。世界にはもう斜塔などないという意味なのだろうかと奇妙に思ったが彼は斜塔がどこにあるのか知らないのかと続けて聞いた。すると、この町にはないという意味だったのだろう。

斜塔について、二十年の間たくさんの資料を集めた。図書館に通い学校から支給されたノートを節約して一冊を斜塔のためだけに使った。一年もたたずに半分が埋め尽くされそのままではノートをすぐに使い切ってしまうと気づいたので、そこから先は文字を半分ほどの大きさに小さく書いた。それから一年が経った日に残り半分のまた半分に達した。文字をまた半分の大きさにした。二十年経った今でもそのノートを使っていて斜塔について知りうるすべての情報がそこに書かれているはずだった。

斜塔がどこにあるのか空港の観光案内係に説明するためには少なくとも一日はかかると思

われた。考えてみれば、斜塔について誰かに話をしたことなどそれが初めてだった。塔の所在だけでなく何故その場所に塔が建てられたのか、その資金を出したのはどの教会で、実際に建築の指揮をとったのがどの親方であり、塔の傾き始めた時期とその理由。そのままであれば塔が倒壊する時期、しかし、破壊した塔の欠片が落下した場所はすべて塔の持ち主の所有となるのが法によってきだめられているため、塔の持ち主は何の対策も打たず、周辺の地主たちが結社を作り人知れず塔の倒壊を防いでいるなど、斜塔が何処にあるのかを理解するために説明しなければならないことはたくさんあった。

観光案内係が塔の所在を理解するまでにどれだけ時間がかかるものか想像もつかなかったが、話し始める前に大切なことはすでに理解していたのだろう。翌日も吹雪は収まることなく飛行機の離発着は不可能だと聞かされた。そのかわり、観光案内係は列車の手配をしてくれて雪の中にほとんど埋まった列車に乗り込み塔のある町へと出発することができた。案内係の青年は別れる時、真新しい一冊のノートを手渡し「よい旅を」と言ってくれた。その時はまだ、二冊目のノートが必要になるとは思えなかった。

列車は雪の底を力強く走り続けた。窓の外には雪以外の何も見えず乗客は少なかった。それでも駅で止まるたびに乗り込んでくる乗客はやがて席を埋め通路にまで座り込んだ。暖房は効きすぎていて誰もが汗を滴らせていた。大きなトランクを運びその上に座り込む者や、すぐに降りるのか列車のドアの近くから離れようとしないうる者までいた。自分の切符を見てもその表面に印刷されている文字は見たことがなく、目的地は分からなかった。検札に来た車掌のことは分からず返事をせずにいるとまわりの乗客が代わりに何かを答えていた。誰もが好意を持っているように見えたが、次の駅に着くとその親切なはずの人々の手があわただしく動き、抵抗する暇もなく荷物や服や身体を次々と列車から運び出した。列車が動き出した後、たった一人で見知らぬ駅のベンチに座り込んでいた。幸い荷物は一つもなくなっていなかったから、あの人たちは悪意があったわけではなかったのだろう。

あるいはその駅こそが斜塔の最寄りの駅なのかもしれない。あれほど積もっていた雪がその駅の周辺にはもうなくなっていて山の中腹にある駅からはるか下の方にある海岸まで、平たい家屋が山肌に張り付くように建てられているのが見えた。そして、海岸には確かに塔の影が見えた。駅からは山の勾配の急なことや、海岸に続く道が岩だらけなのが見えたので、荷物はそれほど大きくはないがこの山を下ってしまうともう二度とこの駅に戻ることはできないだろうと思えた。駅舎の出口の扉は重く開けるためにはそこにいた駅長の手助けが必要だった。この駅で降りた客はお前が最初だというような意味のことを駅長は言った。あの海岸にある塔は斜塔ですかと尋ねたが駅長は何も答えなかった。確かめるためには海岸まで降

りるしかなかった。

これまで一人も降りた乗客のいない駅に続く道は山を登るためだけに作られていたので山を下ることは困難だった。ノートが二冊だけなのに荷物はことのほか重く、五歩も進めば動けなくなり十分は休まなくてはならない。それでも山の頂ぎにいた太陽が水平線に触れようとする頃、ようやく海岸の砂を踏むことができた。

山の上から見えた塔の影は砂浜に立つと人の背丈ほどしかなくとても塔と呼べる代物ではなかった。それでもそばに近寄ればそれが精巧に作られた塔の模型であることは分かった。表面に刻まれた四角い窓は夕日を反射して本当のガラスでできているかのようだった。窓を覗くと指よりも小さな人間が机に向かって何か帳簿をつけているのが見えた。動いているのか止まったままなのかは分からなかった。砂地の上で塔の模型はゆっくりと右や左にかしぎ、少しも静止しなかったから、その中の人動いていても止まっても違いは分からない。揺れが大きくなりこちらに倒れそうに見えたので手を伸ばし人差し指で模型の中央をそっと押し返した。だが力の加減をまちがえたのだろう、塔は急に海に向かって滑り始め止めようにも指をかける場所はなく、そのまま波の上に進んでいった。波に揺れる水面で塔の模型は垂直を保ち、岸に寄せる波を避けながら模型は真っ直ぐに水平線に向かっていった。やがて塔の模型は太陽とともに水平線に沈んでいった。それを見てあれはやはり斜塔ではないことが分かった。

砂浜の砂は温かく塔の模型のあった場所に座って太陽と塔の模型の消えたあたりを見つめていた。山の上の駅を通過する列車の警笛が幾度も聞こえた。駅から見下ろすと山肌にあったたくさんの住居はここからは一軒も見えない。月はきっと山の向こう側にあるのだろう。空には星さえなかった。海は闇にかくされ波の音だけが聞こえていた。波の間から声が聞こえた。出港の時間です。

不意に荷物が持ち上げられつられて立ち上がった。砂浜から海の中へ進んでも少しも濡れることがなく靴が硬い床を踏んだ時にはそこは明るい船の中だった。荷物を運んで前を歩いていたのは大きな男でその身体が船を隠していたのかもしれない。甲板に荷物を下ろすとその先は自分で運ぶようにと言い船の奥を指差した。船の中ではどこにいても油のにおいがしていたがそのにおいが何処から来るのかは分からなかった。窓の外から吹き込む風に混じっていたり、客室通路につながる階段から漂って来たり、すれ違う水夫の身体からにおったりするので、船全体が油のにおいをさせているわけではないと思った。

客室の壁には窓はなく壁一面に斜塔の絵が描かれていた。その絵はあの旅行記の写真と同じ

位置から描かれていたので一目で分かった。客室乗務員の青年にこの絵の場所に行きたいのだと打ち明けると、呆れたような顔でこれほど何かの場所などではなくこの船の船長の肖像画だと教えてくれた。こんな姿をした船長がいるものだろうかという疑いを口にする青年は確かにこれは二十年以上も前に描かれたのだから今の船長とはずいぶん違うかもしれないと言ひ食事の時間だと告げた。

翌日、甲板に上がり明るい海の上で見ると船は意外と小さくて、夜の間に見た無数の客室や百以上もの席のあるあの食堂がこの船体の中に収まっているとは考えられなかった。船尾では食堂で席が隣だった目の大きな若い娘がノートのパージを千切っては海に捨てていた。近づくとノートを隠すので、何を捨てているのかは聞かなかった。娘は一人で旅をしているのだと言うが目的地については明かさなかった。娘の客室の壁にも絵があるという話になりその絵が彼女の生まれ故郷に昔あった塔にそっくりであるだけでなく、塔を見上げる人物像の中に彼女の祖父の姿が見出されるのだとも言った。そこで旅行記の写真の切り抜きを見せると娘はひどく狼狽してもう何も話してはくれなくなった。客室の壁にはどの部屋にも同じ絵が描かれているのかもしれない。

毎日雲のない青空が続き、海の水もやがて干上がるだろうと思えた。だが、船は海が蒸発する前に次の寄港地についた。港の遙か向こうに、天にも届きそうな高い塔が見えた。ここが目的地なのだと分かった。船を降りるとき、操舵室の窓越しに船長の姿が見えた。壁の絵とは少しも似ていなかったが、確かにあの絵は船長の肖像画だと言われたら、それを信じるだろうと思えた。

港には他にはだれも下船しなかった。船から降ろされた積荷は船よりも高く積み上げられすぐに港のあちこちに消えて行った。そのかわりに極彩色のプラスチックで作られた模造食物や乾燥させた大きな蜻蛉や百足の束、十人ほどの奴隷が船の倉庫に運び上げられて行くのが見えた。

港の中央を通り中心街を抜けるとき町の向こうの森に大きな塔が聳えているのが見えた。壁は古い煉瓦でできていて鳥がとまるたびに崩れ欠片が地上に降り注いでいた。森に入ると空は梢の葉に隠されていて見えないが、時折頭上を覆う葉をすり抜けて土の塊が落ちてきた。塔はすぐ近くにあるようだった。落ちてきた土をビニール袋に包んでノートの白紙のパージに貼り付けた。一冊目のノートの最後のページだった。

森の奥に進むほど、塊のままで落ちて来ることはなくなったが、落ちて来る土は大量になっ

ていった。森に入って三日目になると土は途切れなく降り続け森が土に沈んでしまうのは確かなことに思えた。そして、土の雨が不意に止むと、そこは塔の中だった。

塔の内側に住んでいると塔が傾いているかどうかなど分からない。もしも傾いているにしても、塔の中ではそれが垂直なのだ。塔の住民はいくつかの村を作っていて、一番下の領域を住処とする村の長がそう言った。壁には間隔をおいて小さな窓が空いていて、高いところの窓はだれも手が届かず、鳥の所有物のようにになっている。窓と窓の間の距離は定まっておらず、規則性は見られない。宇宙は無数の窓によって構成されていると説明されれば誰もがそれを信じただろう。

塔の通路は壁に沿って塔の上へと続いていた。鳥のこぼす土が所々円錐形の墓標のように堆積しても、通路を通る人たちに踏まれてすぐに崩れてしまうようだ。上の方へ登るにつれて土は厚く重なり窓に手が届くようになると、鳥は用心をして窓に近づこうとせず、土の墓標は減り窓は再び高く遠くなる。

森の一番高い木よりもはるかに高くまで来ていた。塔の頂上に近づいているのだろう。呼吸がこんなに苦しいものだとは知らなかった。頭上で空に向かって開かれた窓には深い青に染められた虚無しか見えない。塔の外には何もないのではないかとさえ思った。辿り着いた通路の終わりには扉さえなく、一步踏み出せばそこは物見台になっていた。

そこからは塔やそれを取り巻く森の向こうにある港から広がる海までがすべて遥か下の方に見えた。物見台は狭くそこに四人も立てばそれ以上は入れないはずだ。塔の周りを順番に見るとどの方向にも同じ光景が見えた。同じように森がありその先に同じように港があった。注意深く観察すればどの森もどの港もその港に停泊するどの船舶もまったく同じであることが分かるだろう。もしも塔が傾いていたならそうは見えなかったはずだ。この塔もまた斜塔ではなかった。

太陽はあまりにも近く空気は限りなく乾燥していたので数分もすると視力が失われた。それから、荷物を無くさないようにカバンの持つ手に力を込め塔の中に戻った。しかし方向を間違えたのだろうそこには通路はなく落下が始まった。服が風を孕みいつもの三倍ほどの体積に膨れた。カバンの中でノートががたがたと音を立てていた。目が見えなかったので落下がいつ終わるのか予想もつかなかった。落下ではなく飛翔が始まったとしても、違いに気づくことはなかっただろう。

もしも塔が傾いていたらこのとき死んでいただろう。曲がった塔の壁の何処かに打ち据えられて身体は砕けそのとき命は終わったのに違いない。しかし斜塔ではなく垂直に立つ塔に沿って落下する物体は壁に接触さえしなかった。地上は船出を祝福する人々で溢れ、港でよく見かける大きな蜻蛉から剥がした硬く透明な羽根を手にも振り回し、風を切る低い音を響かせていた。その日、空から港に落ちて来るものはその羽根の上に落ちるしかなかった。

やがてすべての船が祝福を受けて出港すると、船のいなくなった港の設備はそそくさと片付けられ、後にはだらしなく伸びたコンクリートの道だけが残った。道の端に等しい間隔で並べられた船のおもちゃはいずれムカデと大ナメクジが奪い合い破壊してしまうだろう。港のない土地の一本だけ続く国道の中央を夜になるまで歩くと高速バスが乗客を待っていた。行く先に斜塔があるかと尋ねると運転手は行って見なければ分からないと答えた。その答えがそれ以上はないほど合理的に聞こえたので乗車券を買った。

その日から七十年の間、世界中を探し続けたが斜塔はどこにも見つからなかった。二冊目のノートはまだ半分しか使っていない。